

リレーションシップバンキングと中小企業融資の活性化

—日本と中国の比較研究—

神戸大学大学院生 劉 亜静

本稿では、日本と中国の中小企業融資の問題点について、特に中国の中小企業融資困難に対して、リレーションシップバンキングというビジネスモデルの有効性について検証する。

中小企業は大企業と比べ、資金調達困難な要因として情報の非対称性と契約の不完備性が存在する (Berger and Udell, 1998)。リレーションシップバンキングの主な機能は、通常では入手不可能な個別企業に関するソフト情報 (企業個人情報) によって、中小企業金融の二つの主な問題である情報の非対称性と契約の不完備性を抑えるのが目的である。

さらに、リレーションシップバンキングは企業のソフト情報を蓄積することを通じ、企業の資金需要に迅速に対応でき、一時的に企業業績が落ち込んでも、長期的視点から安定的に資金を提供することが可能になる。同時に、銀行は企業成長のためのアドバイスや情報提供といった資金供給を超えた機能も果たし、いわば企業とともに成長できることも期待される (Berger and Udell, 1995)。しかし、リレーションシップバンキングには、デメリットも存在する。以下では、先行研究の中でリレーションシップバンキングのメリットとデメリットを四つの仮説にまとめる。第1に、企業と銀行の長い取引を通じ、企業のソフト情報を集めて、情報の非対称性を緩和することによって資金調達が可能である。第2に、企業と銀行の長い取引を通じた、より低い金利による貸出条件の改善が可能である。さらに、リレバンのコストとして存在する一つの問題として、第3にソフトな予算制約問題 (soft-budget constraint problem)、そして、第4に、ホールドアップ (hold up) 問題。これら4つの仮説に対して、中国の浙江省のデータを用いて、仮説検定を行った。分析結果は、リレーションシップバンキングのメリットが浙江省の中小企業融資する時、有意に存在すると判明したが、デメリットについて強く証明できなかった。結論として、リレーションシップバンキングは中国の中小企業融資と資金調達の有効な方法として、広く活用可能であれば、中小企業の発展に大きな貢献が見込まれる。さらに、中国で既に存在しているリレーションシップバンキングの「中国特色」、とリレーションシップバンキングのデメリットについて、これからの課題として継続し、研究したい。

キーワード: リレーションシップバンキング、中小企業金融、ソフト情報